
ホープ～魔法の世界にも希望を～

生時(レジェンド)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ホープ～魔法の世界にも希望を～

【NNコード】

N1849F

【作者名】 レジエンド 生時

【あらすじ】
「ホープ」の番外編です。今回はファンタジー小説を書いてみました。

第1章 希望の戦士達

作者からのメッセージ

今回の物語は、「ホープ～まだ見ぬ明日～も希望を～」の番外編です。

読んでない方は、読んでくださると嬉しいです。

もちろん読んでない方にも分かるように、解説を入れて書くつもりです。

前からファンタジーものを書きたいと思つていまして、「ホープ」の番外編で、ファンタジー小説を書いてみよつと思ひます。「ホープ」の番外編なので、格闘やギャグの要素も入れよつと思っています。

あと、誰が話しているか分かるように、「」の前にキャラの名前を書くことにしました。（ゲームのRPGをやるときみたいに、読むと読みやすいかな・・・）

では、皆さんと一緒に、不思議な世界へ冒険の旅に出かけましょう。

彼女はまだ知らない・・・

自分の国の魔法世界が今どうなつてているかを・・・

ミサ

「上夫、一緒に天馬の散歩に行こうよ」

ミサ・・・」の物語のヒロイン。魔法世界から、結婚相手を探しに、この世界にやつて来て、この物語の主人公、あいづえお愛上夫と出会い、恋人となり、現在は同棲している。

二十一歳なのが、普段は十五歳くらいの童顔でかわいらしい感じ

の子だが、酒を飲むと容姿や言葉使いが大人の女性になり、牛乳を飲むと元に戻る魔法使いである。

セイヤ

「相変わらずかわいいだろう。俺の子は」

セイヤ・・・神様の間違いで、人間として生まれてくるはずだったが、犬の姿で生まれてきてしまった犬人間。（周りからは化け犬と呼ばれている）

未亡人の上夫の母と結婚し、天馬という子どもを授かる。ただし、彼も顔は人間だが、体は犬、黄、都市伝説になつた人面犬みたいな姿である。

愛子

「おい、天馬^{（セイツ）}を外に出すと大騒ぎになるぞ！ おい、アニキ！」

大岩愛子（旧姓は愛）・・・上夫の妹で、元ヤンで、兄から格闘技を学んでいる。

イジメが嫌いで、いじめられていた大岩力也という同級生を助けて、その後、結婚した。

「ホープ」の時は中一だったが、現在は十六歳の主婦である。

上夫

「久々に実家に帰つてきたら、相変わらず面倒のかかる一家だぜ」

愛上夫・・・主人公。変な名前以上。

上夫

「コラ！ 作者！ 何で俺だけ適当な解説なんだ！」

・・・

上夫

「シカトするな！俺主人公だろう

して代

「天馬ちゃんは、お母さんが観てているから、久々に皆で出かけてきなさい」

愛して代・・・上夫と愛子と天馬の母で、セイヤの妻。
のんびりした性格で、何事にも動搖しない。
化け犬扱いのセイヤを、して代だけは、結婚前から人間と同じよう
に接する優しい女性である。

力也

「義お母さん、天馬ちゃんは僕が観ていますから、休んでいてくだ
さい」

して代

「あら、ありがとうね力也君。」

ミサたちは、よく行く喫茶店「LUNA」に向かった。

その時、道端でケガをしている老人が倒れていた。

ミサ

「おじいちゃん！」

老人

「ミ、ミサ・・・か・・・？」

上夫

「ミサの知り合いか？」

ミサ

「私の祖父です」

普段のミサは、ティショングかなり高い。
一日一緒にいたら、かなり疲れる事だろう。

ミサ

「おじいちゃん、この人が私の彼氏の愛上夫、私はウツチーって呼
んでるのよ」

老人

「ハアハア・・孫がお世話に・・・イタタタ・・お世話に・・・」

上夫

「・・ミサ、お前の魔法でケガを治してやれよ」

ミサ

「あっ、ゴメン、忘れてた。」

上夫

「おいおい」

ミサ

「マジカル、マジカヨ、マジダネ、マジヤバイ・・・」

ミサは回復系の呪文を唱え、祖父の傷を治した。

老人

「ウンチーさんでしたか？」

上夫

「作者ー俺の名前をわざわざ変な風にするなー。」

ミサ

「ウンチーじゃなくて、ウツチーだよ」

老人

「うりや、すまんかった。」

ミサ

「そんな事より、おじいちゃん何しに来たの？何でケガしてたの？」

上夫

「ううじやあ、何だし、瑠奈さんのどうんで話を聞こうよ」

喫茶「LUNA」・・・

龍一

「うりやしませ」

ミサ

「うるさい。瑠奈さん、龍一さん」

上夫や愛子も一人に挨拶をした。

瑠奈

「あら、皆久しぶりね」

神威龍一・・・「武勇伝」の主人公。

容姿は女の子みたいな感じの青年だが、天神流という古武術の十八代目継承者である。

小学時代の龍一は、父親が「伝説の格闘王」と呼ばれた格闘家だったのに、龍一自身は弱いためイジメられていた。

そんな時に、月形瑠奈に助けられ、弟子となり、そして、結婚し、現在は聖華という娘がいる。

神威瑠奈（旧姓は月形）・・・天神流の十七代目で、龍一の妻である。

普段は喫茶「LUNA」を経営しているが、十七歳の頃から結婚するまでは、「アルテミス」と呼ばれるスイーパーでもあった。

瑠奈は、母親を幼き頃事故で亡くし、十七歳の時に、父親と恋人をある悪魔との戦いで亡くし、その後、龍一と出会うまでは、一人で裏社会を生きてきた女性である。

上夫

「この店ならヤバイ話をしても大丈夫ですよ」

老人

「実は、ワシらの国が大変なんじゃ」

ミサ

「どうじゅ」と?」

老人

「狂った魔法使いが、魔法の国を支配しようとしている」

ミサ

「誰なの？」

老人

「奴の名は、ウエオハ・アクダーじゃ」

上夫

「（なんて、名前だ・・これじゃあ俺が、悪人みたいに聞こえる）」

老人

「ウエオハ・アクダーは、カールと言う大魔法使いの弟子じゃつた。だが、カールは去年病気で亡くなつた・・それからじゃ！ウエオハ・アクダーが我が国を支配しようとし始めたのは・・」

上夫

「あ、あの・・ソイツをフルネームで呼ぶのをやめませんか？」

老人

「そつか・・まあとにかく、ウエオハみたいな奴は最低な男じゃ！」

上夫

「なんか僕が、最低の男のように聞こえるんで、アクダーでお願いします」

黙つて聞いていたセイヤが、笑いながら、「上夫は最低な男・・と、何度も咳き始めた。

ムカついた上夫は、セイヤに鉄拳を喰らわせた。

老人

「悪い魔法使いのほとんどが奴の手下になつた。そして、奴らは、百年前に伝説の勇者によつて、封印された大魔王を目覚めさせようとしている。それを阻止するため、戦が始まつたんじや」

上夫

「それすごいケガをしていたのですね」

老人

「イヤ、ワシは怖いからこの世界に逃げてきた。まあ、久々にミサに会いたかったし・・・でも、この世界に来たら、ガラの悪い、餓鬼共に殴られ、金まで取られた」

愛子

「お前も十分、最低な男じやねーか」

上夫

「愛子・・すいません。妹は口が悪くて・・」

老人

「どこの世界にも悪人はいるんじやなー」

愛子

「私の事か?」

老人

「ち、違います。さつきの餓鬼共です。」

愛子に恐怖を感じ、思わず敬語を使つミサの祖父・・・

ミサ

「でも、おじいちゃん、何で酒を飲まなかつたの？」

老人

「おお！恐怖で忘れていた」

上夫

「この人も酒を飲むとなんとなるのか？」

ミサ

「うん！龍一さん、お酒なら何でもいいので、持ってきてくれますか？」

龍一

「かしこまりました」

しばらくして、龍一が、ビールを持ってきた。
そして、ミサの祖父がビールを飲むと、カツコイイー十代ぐら一の男性になつた。

ミサもビールを飲み、大人姿になつた。

ミサ

「おじい様は、お酒を飲むと、若返るのです」

ミサの口調が上品になつた。

老人

「申し遅れたが、俺の名はドランだ。俺は魔法の世界に戻つて、アカダーたちを倒す！」

ミサ

「おじい様、私も行きます」

セイヤ

「上夫、彼女の国が危ないのに、お前は行かないのか？俺は行くぜ！魔法の世界を守りたい！」

上夫

「何お前まで、キャラを変えようとしてるんだ。」

ミサ

「ありがとうセイヤさん

上夫

「分かりました。俺も武道家です！一緒に行きますー。」

上夫もカツコイイことを言つているが、実は大人姿で美人となつたミサの前でカツコイイところを、見せたいだけである。

愛子

「このメンバーじゃ心配だから、私も行つてやるよ」

龍一

「ルナさん、面白がりうですね。僕らも行きませんか？」

瑠奈

「そうね。私たちも行きますわ」

こうして、アクダーを倒す戦士達が集まつた。

第一章 希望の戦士達（後書き）

最近忙しいです。>
調子も悪いですが、ミサたちと一緒に、冒険の旅をしたいと思いま
す。^_^

第2章 新たな仲間

謎の男

「魔法の世界・・・面白そうだね」

本を読みながら、無言でミサたちの話を聞いていた一人の青年が、ボソッと呟いた。

上夫

「あれ！？お密つて他にいたんですか？」

青年は立ち上がり、ミサたちのほうに近づいた。
上夫たちは青年の顔を見て驚いた。

セイヤ

「じょ、生時さん・・・」

謎の男の正体は、なんと作者の生時であった。

生時

「僕の気配に気づかないと、武道家としてまだまだ未熟だね」

生時・・・クローン病という難病と闘つた青年で、「ホープ」や「武勇伝」などの作者である。

格闘技が好きで少林寺拳法と空手を学んだ事がある青年だ。

上夫

「気配に気づかなかつたんじゃなく、アンタの存在感がないだけだ

うつ。そんな事より、俺だけ解説が適当だつたぞ！大体アンタの解説なんて必要ないだろ！」

セイヤ

「また、現実逃避ですか？」

生時

「まあ、しようがないから、行つてあげよう

上夫

「来るな！帰れ！ジャマだ！」

生時

「上夫君、僕は作者だよ。その気になれば、生時は一人でアクダーケ倒した・・と言つストーリーにする事が出来るんだぜ！でへへ」

上夫

「そんなの誰も読みたくないよー何が、でへへだ！」

ドラン

「無駄話はそれまでだー！時間がない、急いで魔法の国へ行くぞー！」

愛子

「コイツがあのジジイと同一人物とは思えんな

龍一

「どうやって行くんですか？」

生時

「ドランちゃんから四次元ポケットを借りて・・」

上夫

「頼むで、喋るな」

ミサ

「私たちが持っているこの指輪で、魔法世界への扉を出します。」

ミサが呪文を唱えると、指輪が光、その光から魔法世界に通じる扉が出てきた。

上夫

「この向こうに、魔法の国が・・・」

ドラン

「行くぞー。」

「うして戦士達はアクダーを倒すため、魔法の国へ向かった。」

第2章 新たな仲間（後書き）

また僕自身を登場させてしまった・・・

第3章 魔法の世界

戦士達はつこに魔法の世界にせつて來た。

上夫

「ここが魔法の世界・・・」

ミサ

「ここは私の生まれた街・・ファンタリームです」

ミサの故郷ファンタリームは、中世ヨーロッパを感じさせる街だったが、今はアクダーたちとの戦いで、荒地となっていた。

戦士達が街を歩いていると、後ろからミサを呼ぶ声が聞こえた。

マーク

「ミサー！」

ミサ

「お母様！」

後ろからミサを呼んでいたのは、ミサの母マークであった。

ミサ

「お父様は？」

マーク

「・・・家に来なさい」

戦士達はミサの家に入つていった。

家中には、大怪我をしてこるミサの父、ナイトが寝ていた。

ミサ

「お父様・・・」

マーマ

「あなた、ミサが帰つてきましたよ」

ナイト

「うつ・・・〃、ミサか?」

ミサ

「お父様、今私が回復系の魔法で・・・」

ナイト

「む、無理だ・・・俺はアクダーの・・・ハアハア・・・魔法で毒に侵されていり・・・お前の・・・魔力では治せん・・・」

ドラン

「ナイト、すまない・・・俺が逃げなければ・・・」

ナイト

「ち、父上・・・〃、ミサを・・・お願いし・・・ます・・・〃、ミサ・・・最後に・・・お前の顔が見えて・・・良かった・・・」

ミサ

「お父様?」

ミサの父、ナイトは、永遠の眠りについた・・・

しばらくの間、無言の時間が続いた・・・

それから数時間後・・・

瑠奈がミサのために牛乳を持ってきた。

ミサ

「瑠奈さん・・・」

瑠奈

「今の姿だと、泣きたくても泣けないでしょ」

ミサは牛乳を飲み、子ども姿に変わった。

そして、大声で泣いた・・・

そんなミサを、瑠奈がそつと抱きしめた。

第3章 魔法の世界（後書き）

今回はシリアルな話にしてみました。

第4章 メシア王国

次の日・・・

ミサの父ナイトの埋葬が行われた。

ミサ

「パパ、必ずアクダーリを倒し、この国を平和な国にします」

それから数時間後・・・

上夫は、強くなるための特訓をしていた。

上夫が特訓をしていると、覆面をした者が襲い掛かってきた。

上夫

「お前、アクダーリの手下か?」

覆面

「・・・」

上夫

「話す気はないか・・・」

そして二人の戦いが始まった。

上夫の攻撃をすべて交わす謎の覆面・・・

そして、覆面の回し蹴りが直撃した。

上夫

「つ、強い・・・だが、見たことのある戦いの方だ・・・」

上夫は何度も攻撃を仕掛けるが、すべて紙一重で交わされている。

上夫

「（落ち着け・・アクダーヘの怒りで、相手に俺の動きを読まれて
いる・・冷静になれ・・そして、『気合いの入った一撃を与えれば勝
てる！』」

覆面が攻撃しようとした瞬間・・

上夫の気合の入った正拳突きが覆面に炸裂した。
覆面はふつ飛んだが、一回転し着地した。

覆面

「いい一撃だ！上夫君」

上夫

「その声は、龍一さん！？」

覆面の正体は龍一だった。

覆面を取り、血がついている口元を手で拭いた。

龍一

「君の強さを知りたかったんで、ためさせてもらつた」

上夫

「やはり龍一さんには敵いませんね」

龍一

「だが、さつきの一撃は良かつたよ」

上夫にとって、龍一は憧れの武道家・・・

そんな彼に警めをられたのだから、上夫は嬉しかった。

そして、一人はミサの家に戻った。

家の中では、老人に戻ったドランが叫んでいた。

ドランはミサと違い、酒を飲んでから五時間経つと、元の老人の姿に戻るのだ。

ドラン

「ワシは怖いから行きたくない！」

ミサ

「おじいちゃん」

ドラン

「アクダーツて、すゞく強いんだぞ！だから行かない！」

ミサ

「仕方ない・・お酒を飲ますか・・」

ドラン

「酒だ！わーい、わーい」

ドランは酒を飲み、若返った。

ドラン

「息子の敵は俺が討つ！」

愛子

「ホント変わったジジイだぜ！」

ミサ

「おじこひやん、若い頃は、勇敢な魔法使いだつたらじこの

上夫

「だから若返るべ、勇敢になるのか」

生時

「あの～、この世界に来たのはこいけど、俺、金、土、日は仕事なんだけど・・・」

上夫

「知るか！そんなの！ていうか、ジャマだから帰れ！」

生時

「そんなこと言うと、生時が一人でアクダーを倒し、ついでに裏切り者の上夫を退治した・・といつストーリーにするぞ・・そして瑠奈さんを俺の嫁に・・でへでへ」

上夫

「分かつたよ（何で）コイツが作者なんだ・・・」

愛子

「ところで、これからどこに行へんだ？アクダーつて奴はどうるんだ？」

ドラン

「それは分からん・・とつあえず、この近くにあるメシア王國の王が無事か確かめに行きたい」

ミハ

「さうね・・じゅあ、ママ、行つてくるね

マーク

「氣をつかうね」

戦士達はメシア王国へ向かつた。

第4章 メシア王国（後書き）

金、土、日、と仕事行くのイヤだな～

第5章 伝説の勇者

メシア王国に向かって、戦士達は歩いていた。

上夫

「さつきから、一人一ヤーヤしてる奴がいるんだが・・キモイぜ」

愛子

「どうせくだらなー」と考えてくるんだろう

「一ヤーヤして歩いているのは作者の生時だ。

生時

「（瑠奈さん、ほ、僕あなたのが好きでした・・私に惚れると大変ですよ・・僕は本気です！僕を男にしてください！・・いいわよ。リコウの事は忘れて、生時さんの女になつてあげる！・・瑠奈はそつと生時を抱きしめ、キスをした・・でへへ・・）」

上夫

「おい、作者！大丈夫か？」

生時

「ん？・・だ、大丈夫・・それにしてもロージア国・・？ロージアはルナシーの曲だった・・俺が一番好きな曲・・曲は関係ないか・・づらめしや～王国・・違うな・・あつ飯屋王国だ」

上夫

「作者・・静かにしてくれ」

生時

「はい・・・（俺は作者だぞ！一番工口い・・じゃない偉いんだぞ！・・生時さん、私が元気にしてあ・げ・る・・・ありがとうう瑠奈さん・・よし、次の作品は僕と瑠奈さんの恋愛モノを書こう・・・」

瑠奈

「大丈夫ですか？」

生時

「瑠奈さん、僕と結婚しよう」

瑠奈

「・・・」

生時

「僕は作者だ・・龍一君には、違う女性と結婚したと書き直しますから・・次の作品は、瑠奈さんと僕の恋愛小説を書くよ！」

上夫

「おかしい奴と思っていたが、ここまでおかしい奴だとは・・・

その時、戦士達の前にモンスターが現れた。

ミサ

「スライムママ！」

愛子

「何でスライムに様なんか付けるんだ？」

ミサ

「スライムサマまでが名前なのよ」

生時

「俺に任せろ!」

スライムサマは、生時に恐怖を感じ、逃げた。

上夫

「おい!それでいいのか!?作者敵^{おまへ}が出てきたら、全部、生時に恐怖を感じ、逃げた・・と書いてつもりか!?」

生時

「まさか・・今回だけだよ・・」の裏技使^{おまへ}うのは・・・

上夫

「裏技つて何だよ!?」

ドラン

「おい、喧嘩^{けんか}するな!それより急ぐぞ!」

戦士達は再びメシア王国に向かった。

2時間後・・・

戦士達はやっと王国に着いた。

ドラン

「着いたぞ!」がメシア王国だ

ミサたちの街とは違い、この国の建物などは、あまり壊れていない。

上夫

「この街は、襲われていないのか？なら王様は無事か・・・」

村人A

「違うーこの国は、アクダーラの四天王の一人、ブラック・ドリーマーが支配しているんだ」

村人B

「奴は夢を操る事ができる。夢の中で人が殺せるんだ」

セイヤ

「キヨンシーみたいだな」

龍一

「タイトルが違うよ。13日の金曜日だよ」

愛子

「違うーバタリアンだ！」

セイヤ

「キヨンシーですよね・・生時さん」

生時

「ん？僕はキヨンシーよりジャッキー・チエンの映画が好きだなー」

セイヤ

「そんなこと聞いてないよ」

村人C

「エルム街の悪夢だ！ババカラ」

上夫

「何だアイツは！大体、なんで、この世界の人間が、俺達の世界の映画を知っているんだ」

村人B

「ブラック・ドリーマーは、この国の姫、レイラ様を気に入り、姫様は、この国を守るため、自らブラック・ドリーマーのところへ・・・」

ドラン

「そりが・・王は無事か？」

村人B

「ああ、『無事だ』

ドラン

「そりが」

ドランたちは城に向かつた。

兵士A

「何だお前らは？」

ドラン

「王に会いたい・・ドランが來たと王に伝えてくれ」

兵士B

「ジ、ドランさまー...?」

兵士A

「・・・一百年前に、この世界を救つてくださった・・あの伝説の勇者ドラン様ですか?失礼しました」

兵士は急いで、ドランが来た事を、王に伝えた行つた。

上夫

「まさかアンタが、伝説の勇者だったのか?」

ミサ

「ホントなの・・おじいちゃん」

ドラン

「ああ・・だが百年も前のこと・・今の俺はただの隠居・・だから、俺やナイトやマーマは、お前に話をなかつた・・話す必要がなかつた。それだけだ」

王室・・・

兵士A

「国王、ドラン様がお見えになりました。」

国王

「何ー?ドランじゅと・・だが、ドーマーの手下が変装しているかもしけん・・・本物かどうか確かめよ

兵士A

「ハツ

上夫

「兵士が戻つてきた」

兵士A

「無礼は承知・・しかし、貴方が本物のドラン様か試させてもらいます」

ドラン

「仕方ない」

だが、5時間経つたため、元の老人の姿に戻つてしまつた。

ドラン

「だから来たくなかったんじゃ・・ミサ、助けてくれ〜」

兵士A

「やはり偽者ー！」

上夫

「仕方ない・・俺達が食い止めるから、ミサ、酒を貰つてきてジーさんに飲ませるんだ」

ミサ

「うん」

ドラン

「ミサ、わざわざちやたから、下着も買つてきてくれ〜」

ミサ

「・・・分かつた」

上夫、愛子、龍一、瑠奈が兵士達と戦い始めた。

兵士D

「つ、強い！」

セイヤとドランは震えながら隠れていた。

生時

「俺の相手は貴様か！・・手ごわい奴が相手だな」

生時はゴキブリと戦っていた。

だが、虫嫌いの生時には強敵だ。

しばらくして、ミサが酒と下着を持って帰ってきた。
ドランは下着を変え、酒を飲み若返った。

ドラン

「お前らそれでも兵士か？弱すぎるぞー！」

兵士E

「な、何だアイツは・・アイツも強いぞ！」

国王

「やめいー！」

国王の一聲で、戦いは終わった。
ただ、一人だけゴキブリとまだ戦っている馬鹿がいた。

国王

「どうやら貴方は本物のドラン殿・・無礼お詫びする・・

ドラン

「気にしてないぜー（老人姿の時にちびつたのは気にしているが・・・）」

国王

「ワシは非力じや・・国を守るどじるか、自分の娘一人も守れんか
つた・・」

ドラン

「・・・・」

国王

「どじるでの者たちは？」

ドラン

「別の世界から、この世界を救いに来た戦士達だ」

国王

「そうか・・戦士たちよ・・どつか、ドラン殿と力を合わせこの世界を救つて下され」

国王は土下座をし、頭を下げた。

上夫

「任せてくださいーまず姫様を助けに行きます」

国王

「感謝する・・ブラック・ドリーマーは、ここから北に向かつて数キロあたりに屋敷がある。おそらく姫とそこそこいるはず」

上夫

「じゃあ、姫様を助けに行きますか」

戦士達はレイラ姫を助けるため、北に向かつた。

その頃生時は、やつと「キブリを倒す事が出来た。

生時

「やべー、明日仕事でいじょうつ・・瑠奈さんと僕の恋愛小説も書きたいのに・・」

といいながら、彼も北へ向かつた。

第5章 伝説の勇者（後書き）

勇者ドラン・・・レベル23（老人姿は0以下）、格闘家上夫・・・
レベル11、魔法使いミサ・・・レベル7、ヤンネー愛子・・・レ
ベル8、武道家龍一・・・レベル38、スイーパー瑠奈・・・レベ
ル38、病人生時・・・レベル1、化け犬セイヤ・・・レベル1

第6章 ブラック・ドリーマー

レイラ姫を助けるため、北へ向かう戦士達・・・
だが、生時が急に立ち止まつた。

生時
「皆、大事な話がある。聞いてくれ」

上夫
「どうせ、明日仕事だけど、どうしようつ・・・って話だろ」

生時
「そんなくだらん話じゃない！俺達は、この世界を救う戦士なんだ
ぞ！」

上夫
「じゃあ、話してみる」

生時

「実は・・・」の小説のタイトルを、ホープから、生時と瑠奈のラブ
ストーリーに変えようと思つんだが・・・

上夫

「・・・馬鹿を本気で相手するんじゃなかつた」

生時

「（生時さん、まだ一人だけの秘密でしょ・・・すいません瑠奈さん・
・しようがない人ね・・そう言って、瑠奈は生時に優しくキスをし

た・・でへへ・・」

また瑠奈との恋愛を妄想して、ニヤニヤしながら歩き始めた。

愛子

「アニキ、もうアヤシやばいんじやない」

上夫

「もう手遅れだ」

龍一

「生時さん、ルナさんは僕の妻なんだけど・・・」

生時

「ん? 大丈夫だよ。君のも書いてあげるから、タイトルは、龍ちゃん」と//サちゃんの//ラブ物語・・・」

ミカ

「私の彼氏はウツチーだけなの」

生時

「//さちやん、君が龍一君と付きましたよ、僕が瑠奈さんと付きました・・それでこいつじゃないか」

ミカ

「でも・・・」

瑠奈

「生時さん・・・」

生時

「はい！」

瑠奈

「ズボンが破れていますよ」

生時

「さつきの、口キブリとの戦いで服がボロボロだ・・・」

ミサ

「私、口キブリ嫌い！よく倒せたね」

生時

「（破けたモノ縫つてあげるから、服脱ぎなさい）・・・でも瑠奈さん、
僕、病弱な体だから・・・生時、恥ずかしい・・・そういう照れたところ
がかわいいわよ・・・る、瑠奈さん・・・でへへ・・・」

ミサ

「ほんとに変わった人・・・」

ドラン

「おこ、屋敷があるぜ」

上夫

「の中に姫が・・・」

生時

「どうせついて、姫を助けるかが問題だ・・・ブラック・ドロー・マーは夢
を操れるんだから」

上夫

「さあ、急にマジになるなよ・・・」

ドラン

「い、いかん・・やうやう5時間・・・」

5時間経ったため、ドランは老人に戻った。

ドラン

「怖いよ・・ブラック・ドリンクだかコーヒーだが知らんが、ワシ帰りたい」

生時

「落ち着いてください・ドランさん」

上夫

「（作者が真面目になつたと思つたら・・今度はジーさんか・・）」

ミサ

「よしよし、怖くなによ・・ちやんとかわの街で、お酒もひかへきたから・・・」

再びドランは若返った。

ドラン

「伝説の勇者の俺に、怖いモンなんかネーよ

上夫

「ひなつたら、自分で倒して行け」

戦士達は堂々と屋敷の中に入つていった。

ブラック・ドリーマー

「よく来たな！」

「階から戦士達を見下す、ブラック・ドリーマー……姿はあるで、死に神のようだ。

生時

「死に神……クソ！ デスノートがあれば、あんな奴すぐ殺せるのに……」

上夫

「（「ハイ、本氣で言つてこるのか、冗談で言つてこるのか、もう分からん）」

生時

「デスノートと言えば、小畠先生のサイボーグジちゃんGも、じ一ちゃんがかっこよく若返るよなー！」

上夫

「……」

ドラン

「レイラ姫は無事か？」

ブラック・ドリーマー

「ああ……今は夢の世界にこる……それをも夢の世界へいりやが……

・

ドリーマーの手から煙が出てきた。

上夫

「「ホツ　・　・　睡眠ガスか？」

夢の世界　・　・

だが真つ暗で何もない世界　・　・

上夫

「うつ　・　・　！」ほじほじだ？まさか夢の中？」

愛子

「アニキか？！」ほじほじだよ？」

ミサ

「真つ暗で何もない」

セイヤ

「俺達、死んだのか？」

ドラン

「ここは奴の世界か　・　・

ブラック・ドリーマー

「私の世界へようこそ！」

ドリーマーが現れた瞬間　・　・　周りが光つた。

そして、ドリーマーの後ろには女性がいた。
レイラ姫だ。

ブラック・ドリーマー

「ここから出るには、私を倒さないと出られない・・だが、ここでは、お前達は私に触れる事ができない・・逆に、私は攻撃ができる・時間をかけて、ゆっくりと殺してやろう・・ん？確か奴らは八人いたはず・・二人・・いや三人足らんぞ・・まさか！」

現実の世界・・・

ブラック・ドリーマー

「ここにもいないぞ・・寝ている奴らの人数は五人・・どうやら三人も逃げたか・・まあいい・・あの五人を殺しに戻るか

龍一

「僕たちは逃げていないよ

ドリーマーが上を見ると、二階には龍一、瑠奈、生時の三人がいた。

生時

「さつきはよくも俺達を見下してくれたな

ブラック・ドリーマー

「な、何故お前達には睡眠ガスが効かない？」

龍一

「僕とルナさんは、煙が出た瞬間に、ここまで跳んだ・・あんたは夢中になっていたから、僕たちの気配に気づかなかつただけ・・

生時

「俺は普段から、強い眠剤などを、飲んでいるから、効かなかつたのさ

瑠奈

「あなたの負けね」

そう言つて、瑠奈は跳んで、一回転し、ドリーマーの頭にかかと落とし、そしてもう片方の足で、蹴り飛ばした。

これは天神流の技の一つ天誅である。

さらに、ドリーマーが壁に激突したと同時に、苦無が額に刺さり死亡した。

そして上夫たちは田を覚ました。

レイラ姫は、一階の部屋で椅子に縛られていた。

瑠奈たちはついに姫を救い出した。

そして、姫をメシア王国まで送り、再び北に向かつて旅に出た。

第6章 ブラック・ドリーマー（後書き）

二回で6話も書いてしまった。

仕事から帰ってきて、調子良かつたら、続きを書いてつかな・・・

第7章 アクター登場

戦士達は北へ向かつて歩いていた。

ミサ

「おじいちゃん疲れた～、休憩しようよ～、大体、何で北に向かつているの？」

ドランが立ち止まつた。

ドラン

「少し、休憩するか・・・」

生時

「賛成！僕は皆が知らない間に、作者の力で現実世界に戻り、ちゃんと仕事してきたんだぜ！」

上夫

「そのまま戻つてこなくて良かつたのに・・・」

生時

「（生時さん）苦労様・・・と瑠奈が生時にキスを・・でへへ・・・」

また生時の変な妄想が始まつた。

ドラン

「ホントに作者大丈夫なのか？・・・」

上夫

「相手にしないほうがいいですよ」

ドラン

「北に向かっているのは、俺が・・いや俺達が、北のある場所で魔王と戦い、勇者の剣^{つるぎ}という剣で魔王を封印し、そのまま地面に刺し、強力な結界で、誰にも触れないようにした。アクダーは魔王を復活させようとしている。だから、奴は封印してある剣の近くにいるはず」

ミサ

「でも強力な結界がはってあれば、魔王を復活させる事が出来ないから、安心じやない」

ドラン

「いや・・魔王と戦つたときも、俺とカールを合わせ、8人いた。そして、8人の力で封印した。だが、8人のうち、今生きているのは俺だけ、そのため、結界が弱まつてきている。そして、アクダーが強力な力を身につけ、剣を抜いたら、魔王は復活する。」

ミサ

「じゃあ、おじいちゃんが死んじやつたら、結界が無くなっちゃうんだ」

ドラン

「待てよ・・もう一人ライデンというヤツが生きてるかも・・イヤ、間違いなく生きている。俺は老人の姿の時は魔力がほとんど使えん・・そうなれば、結界を簡単に壊す事が出来る。だが、アクダーは、まだ、剣を抜き魔王を復活させていない。ライデンが生きているから、俺が老人の姿の時でも、アクダーは剣に触れる事が出来ないんだ！」

ある北の場所・・・

アクダ一

「わが師、カールが死んで、結界が弱まつたのに、今だ、剣に触れる事も出来ん・・もつと、魔力を高めねば・・・」

マリー・ミーゼル

「アクダ一様、たつた今、部下から、ドリーマーが死んだとの報告が・・なんでも相手は8人・・その中に、あの勇者ドランがいたそうです。」

このマリー・ミーゼルも四天王の一人で、唯一の女性で金髪の美女である。

「そつか・・ドリーマーが死んだか・・（ドランが死ねば結界は解ける・・）マリー、部下達を連れて、ドランを殺せ！」

マリー

「ハツ！」

その頃戦士達は・・・

生時

「（瑠奈さん・・さすがに北のほうは寒いですね・・そうね・・でも、私が温めてあ・げ・る・・でへでへ・・）」

また、生時は妄想の世界に入っていた。
そして、ドランも、

ドラン

「ワシ、帰つていいかな？マジ帰りたい・・・もうワシの時代は終わ
つたから、帰らせて・・・」

5時間経つたため、元の老人に戻り、ミサは

ミサ

「暖かい布団で寝たいよ～、あ～、今日私の好きなドラマが最終回
だつた！観たいよ～、私も帰りたい！」

と、わがままを言い、セイヤは、犬のクセに、

セイヤ

「タバコ吸いくて～、酒飲みて～、誰か肩揉んでくれない？」

などと、言いたい放題である。

上夫は、こいつ等置いて、瑠奈、龍一、愛子の四人で行こうと本気
で思い始めた。

第7章 アクター登場（後書き）

仕事中に、ネタ考えていたが忘れてしました・・・

その頃マリーは、20人の部下を連れて、上夫たちのところに向かっていた。

その時、一人の男が、マリーたちの前に現れた。顔には、額から頬にかけて、傷がある。かなりの修羅場をくぐつてきたのであらう。

マリー

「誰だお前は？」

謎の男

「名前なんてとっくに捨てた・・まあ、ジャパン・Xとでも呼んでくれ」

マリー

「それで、私になんか用か？」

ジャパン

「雑魚20人連れて行つても、やつ等には勝てないぜー。」

マリー

「余計なお世話だ！」

ジャパン

「まあ聞け！俺はこの世界の人間じゃない・・勇者ドランの仲間もそうだ・・俺はたまたま、変なジジイが、不思議な扉から、俺のいた世界にやつて来たとき、好奇心で扉に入り、この世界に来た。」

マリー

「それで？」

ジャパン

「俺は昔、ある男に仕えていた。そして俺達は、ドランの仲間、神威龍一とその妻、神威瑠奈・・裏社会ではアルテミスと呼ばれるスイーパーと戦つて負けた・・・」

ジャパン・Xと名乗った男・・・

それはかつて、水谷凍矢という悪魔に勝負で負け、その後、凍矢の影となつた男である。

そして凍矢は、瑠奈にとつて、父親と恋人の仇でもあつた。

ジャパン

「まさかこんな世界で、やつ等に会うとは思つてもいなかつた・・・さつきも言つたが、雑魚20人で勝てる相手じゃない」

マリー

「負けたヤツが偉そうに・・・」

ジャパン

「負けたから、やつ等の強さを知つていい・・俺はお前らのやつている事に興味はないが、あの二人を倒すために協力してやるつ

マリー

「必要ない！」

ジャパン

「いいから聞け！俺はこの世界に来る少し前に、人を操れる術を身

に付けた・・もちろん操れないヤツもいる。アルテミスを操るのは難しいが、神威龍一なら単純そうだから、操れると思う。そして、龍一を操り、アルテミスと戦わせたら面白いと思うが・・うまいければ勇者達を全員殺す事ができる・・どうだ、いい話だろ？

それから1時間後・・・

戦士達は・・・

生時は妄想の世界に入ったままだし、ドランは帰りたいと叫び、ミサはドラマが見えなかつたため、いじけていて、セイヤは爆睡していた。

その時、男が助けを求めてきた。

龍一

「大丈夫ですか？」

男

「アクダーの手下に村が・・・」

マリー

「私から逃げられると思つてゐるの？」

実はこれはジャパンとマリーの演技である。

ジャパン

「俺の目を見ろ！神威龍一！」

龍一がジャパンの目を見ると、一瞬金縛り状態になった。

「リュウ、その男から離れなさい！」

龍一

「えつ？」

瑠奈がジャパンに向かつて、苦無を投げたが、ジャパンは避けた。

ジャパン

「お前は今から俺の手下だ！・・・龍一、アルテミスを殺せ！殺すんだ！」

龍一

「アルテミス・・・殺す・・・」

瑠奈

「リュウ・・・」

ついに龍一はジャパンに操られてしまった。

第8章 ジャパン・X（後書き）

凍矢については、「武勇伝」を読んでください！

第9章 龍一対瑠奈

上夫

「や、やばい…龍一さんが敵に…」

瑠奈

「…」

龍一

「殺す！」

先に攻撃を仕掛けたのは瑠奈だ！

苦無を投げたが、龍一は右のほうへ避けた。

瑠奈は龍一の動きを読み、避けたほうへ回し蹴りが決まった。だが、同時に龍一も瑠奈の鳩尾に前蹴りを放った。

上夫

「と、止めなきや…」

生時

「やめろ…」

上夫

「何…」

生時

「本気になつたあの二人を、誰が止められるんだ！」

上夫

「・・・」

二人のものすごい攻防戦が続く・・・

マリー

「ジャパン・×・・お前の言つとおり・・あの二人とんでもなく強
い！」

ジャパン

「当たり前だ！（アルテミス、やはり、夫でもあり、弟子でもあ
る神威龍一が相手でも、本気で戦えるとは・・）」

瑠奈はついに、天神流の奥義、龍神を使つた。

龍神は水神・・・降りしきる大雨を、避けるのは不可能・・まさに
奥義龍神は、降りしきる大雨・・・常識を超えるスピードで相手の
急所を確実に攻撃する。あまりの速さで数秒の間、相手を宙に浮か
し動きを封じる・・・これが龍神である。

龍一はそのまま數十メートルふつ飛んだ！

龍一は立ち上がり、口元の血を手で拭いて、ニヤリと笑つた。

上夫

「これが天神流の戦い・・・」

龍一は助走をつけ、一回転をし、かかと落とし・・天神流の技の一
つ天誅だ！

だが、瑠奈は龍一の両足をつかみ、そのまま地面に叩きつけた。

龍一はすぐに立ち上がり、今度は龍一が奥義龍神を放った。
だが今度は、龍一の両手をつかみ、そして、鳩尾に膝蹴りを放った。

龍一

「ゴホッ！」

だが、龍一は右の上段蹴りを・・・

瑠奈はガードしようとしたが、そのまま上段蹴りから下段蹴りに変化させた。

その隙に、龍一が再び奥義龍神を放った！

今度は決まり、瑠奈がふつ飛んだ！

ジャパン

「さあ、アルテミスを殺せ！」

だが、龍一の様子が変だ。

ジャパン

「どうした？ 何故攻撃しない

瑠奈

「（コユウは、アイツに支配されながらも、心の中で戦っている・・・）」

ジャパン

「どうやら、完全に支配できていないようだ・・・」

龍一

「アルテミス・・・殺す・・・殺したく・・・ない・・・殺す・・・」

ジャパン

「もひいい！一度戻つて来い！」（やはり、あの一瞬で、龍一を支配するのは難しかつたか・・だが、時間をかけてやれば、完全に支配出来るはず・・）

上夫

「龍一さん！」

ジャパンたちは、龍一を連れて、一時退却した。
その後を、戦士達は追う事が出来なかつた。

第10章 グレーテル

ミサが魔法で瑠奈の傷を回復させた。

瑠奈

「あらがとう・・//サちゃん」

ドラン

「もういやー、ワシらの強力な仲間が敵になつたんじゃぞーもう帰

りう

生時

「早く、勇者ドランもん・・じゃねー、ドラゴンボールでもない・・
アンタだれだつた?」

上夫

「アンタ、作者だろ?ー・勇者ドランだー!」

ドラン

「ワシ、ドラム缶でいいから帰りして」

瑠奈

「ドランさん、あなたの力はどうしても必要なのです。どうか、力を貸してくださいー!」

ドラン

「うん、分かったー!、怖いけど、ワシ頑張るー!」

生時

「（いいな・・よつし、僕も）もつこやー、僕らの強力な仲間が敵になつたんだよーもう帰るー」

上夫
「帰れば・・つていうかジヤマー」

生時
「・・・ひ、ひどい・・どうせ僕なんか・・・（今度こそ瑠奈さんに励ましてもういい）」

セイヤ
「生時さん、アンタの力は・・どうでもいいけど、力を貸してくださいよ」

生時
「おめーに、励まされたいんじやない！」

セイヤ
「すいません・・」

生時
「僕の方こそ・・す、すまない・・励ましてくれてありがとう・・セイヤ君・・わあ、気合を入れて行こうー！」

瑠奈

「生時さん、一緒に頑張りましょーね」

生時
「は、はいー（妄想じゃないよね・・瑠奈さんに励ましてもういい）

たんだよね・・マジ、嬉しこ）

戦士達はようやく北へ向かい始めた・・・

しばらく森の中を歩いていたら、お菓子の家を発見！

セイヤ

「腹減つていたんだ」

ミサ

「私も」

上夫

「」、「」、勝手に食べたらダメだ！」

その時、

グレー・テル

「ああ～、せつかく楽しみにしていたのに・・・」

と、一人の青年が現れた。

青年も龍一のような優男だ。

上夫

「すいません・・・」

グレー・テル

「まあ、階で食べたほうが美味しいから、階さんもどうぞ」

上夫

「俺達はいい・・君がこのお菓子の家を作ったの？」

グレー・テル

「はい！何か作ってみたかったんで・・あつ、僕の名前はグレー・テルです」

セイヤ

「グレーテル？グレーテルのか？愛子みたいな不良になりたいのか？」

生時

「違うよセイヤ君・・グレーのヴォーカルのテルさん、略してグレーテルさんだよ」

上夫

「すいません・・変なやつりで・・」

グレー・テル

「いや～、面白～よ・・なんか皆さんとは仲良くなれたらいいな～」

上夫

「うん！」

グレー・テル

「あつ、僕用事があるから・・・また会いましょうね」

上夫

「うん」

その頃、ある北の場所では・・・

アクダ一

「何故、ドランを殺してこなかつた」

マリー

「アクダ一様、あの中に、ドランと思われる男はいませんでした
さすがに、マリー・ミーゼルも、泣き騒いでいた老人がドランとは
思つていなかつたようだ。」

アクダ一

「それで、そこの一人は？」

マリー

「強力な助つ人です」

ジャパン

「言つとくが、俺はアンタらの仲間になつたんぢやないぜ！ただ、
龍一コイツを使って、アルテミスを殺したいだけだ」

アクダ一

「そここの男女は強いのか？」

「さう」と、手から炎が・・・

そして、龍一に向かつて、炎を飛ばした。

炎が消えた時には、龍一の姿はなかつた。

アクダ一

「ふふつ・・・一瞬で俺の背後を取るとは・・・」

龍一は一瞬で、アクダ一の背後に回つていた。

アクダ一

「ジャパン・Xだつたな・・お前を今日からドリーマーの変わりに、
わが四天王の一人にしてやる」

ジャパン

「おいおい、俺はお前らの仲間になる気はないと言つたはず」

アクダ一

「そう言つな・・俺の部下になれとは言わん・・お前はお前のやり
たいようにやればいい・・ただ、俺はお前が気に入つただけ」

ジャパン

「・・まあ、そう言つ」となら・・」

アクダ一

「他の四天王も紹介しよう・・マリー、呼んで来い」

マリー

「ハツ」

しばらくして、マリーがもう一人の四天王を連れてきた。

巨大な体格で、名はディール・・・

マリー

「アクダ一様、グレー・テルがいません・・あの子、まだどこかで遊
んでいるよつで・・」

アクダ一

「フツ、まあいい・・これで、魔王を復活させる事が出来れば、世

界は我們のもの・・フッハハ

果たして、戦士達は世界を救えるのか？

第10章 グレーテル（後書き）

今気づいたんですが、「ホープ」の時の時代は2008年なんですが、この物語はそれから2年くらい後の2010年で設定なんですね。そうすると、僕は31歳という事に・・・。それはイヤだから、「作者の力」で29歳のままにしておいつ・・・。

第11章 四天王集結

新たにジャパン・Xを四天王に迎えたアクダー。
大魔王を復活させる時が近づいていた。

グレー・テル

「アクダーさん、遅くなりましてすいません・・・・・あれ? 知
らない人達がいる」

アクダーたちのところへ、陽気なグレー・テルがやつて來た。

マリー

「アンタどこに行つっていたの?」

グレー・テル

「すいません姉さん、ちょっと森でお菓子の家を作つていたら、友
達が出来ました」

マリー

「友だち? まったく何考えているのかしら、この子は・・・・」

ジャパン

「お前らもしかして、姉弟か?」

マリー・ミーゼルとグレー・テルは実は姉弟関係だった。

ジャパン

「俺は、今からアクダーの四天王の一人になったジャパン・Xで、
コイツは俺の奴隸の神威龍一だ」

グレー・テル

「あつ、どうもマリー・ミーゼルの弟のグレー・テルです」

龍一はグレー・テルのほうを見て微笑みながら、

龍一

「強そうだな」

と呟いた。

アクダ一

「これで新たな四天王が揃つたな。早速だがグレー・テル、姉と共に、俺のジャマをする馬鹿どもを始末して来い」

マリー

「かしこまりました」

グレー・テル

「姉さん、アクダ一さんのジャマをする人達つて強いかな?」

グレー・テルは、森の中で知り合つた者たちが、アクダ一の敵とは知らないのだ。

彼はホントに、上夫たちと友だちになつたと思つてゐるし、上夫たちも、グレー・テルが四天王の一人だと知るはずもない。

その頃戦士達は、まだ森の中で休息していた。

上夫

「 あらそろ行こうぜ！」

その時、皆近くに何かがいると気配を感じた。

上夫

「 誰だ！」

謎の生物

「 クワツ！」

ミサ

「 かわいい、 ドラゴンの赤ちゃんだ」

謎の生物の正体は子ビものドラゴンだった。

その時、一人の老人が戦士達に話しかけてきた。

老人

「 めずらしいのう、 ソセゴンがワシ以外になつくなんて」

生時

「 ソセゴン？ 僕の飲んでる痛み止めと同じ名前だ」

ミサ

「 おじいちゃん、 ここのドラゴン、 ソセゴンって名前なの？」

老人

「 そうじゃよ、 アクダーダーを倒す選ばれし、 戦士たちよ」

突如現れた謎の老人。

彼は一体何者なのか？

第11章 四天王集結（後書き）

仕事は忙しいし、調子悪いし、もう入院かな・・・

第1-2章 体調が悪い生時

老人はドランの近くにより、話始めた。

老人

「久しぶりじゃな～、ドラン」

ドラン

「アンタ誰じや？」

老人

「まあ、分からぬのも無理ないよな～、50年ぶりだからな・・・
・・・ワシはお前達と大魔王を封印した戦士の一人、ライデンじや
！」

戦士たちは驚いた。
だがドランだけは、

ドラン

「ライデン？ いた電ならよくやるが～」

と、ぼけた事を言い出した。

ライデン

「おいおい、忘れたのか？ しおがないヤツじや」

そういうながら、懐からお酒を出した。

ドラン

「ああこのへん……・・・・・結構だった」

生時

「武勇伝は僕のデビュー作です」

上夫

ドランは、酒を飲み、若返った。

「ライデン
「オメイ、
酉飲むと苦ぬるのか?ええなあ

「久しぶりだなライデン！」

ライデン

「思い出してくれたか！それよりサブタイトルおかしくないか？普通ライセン登場とかだと思うんだが・・・・体調が悪い生時つてなんだよ」

生時

「体調が悪いんですよ・・・・・・・隊長じやないですよ」

「くだらね」

ライデン

「それにしても、カールの弟子はとんでもない事をしようとしてる」

ドラン

「そりだー。こんなところで休んでいる場合じゃない」

ミサ

「疲れたー、もう少し休もうよ」

わがままを言つミサに、上夫は酒を飲ませ、大人の姿に変身させた。

ミサ

「皆、急ぎましょ」

ライテン

「オメーの孫も変わつていいのつ」

生時

「困つたなー・・・・・・・・瑠奈さんもいいが、大人姿のミサちゃんもいい・・・・・・・・最後は3人仲良く暮らしました・・・・・・・とでも書いてやるうかな」

その時！

皆人の気配を感じた。

上夫

「誰だ！」

グレーーテル

「僕です。グレーーテルです。」

上夫

「君か・・・・・」

グレー・テル

「困ったな、せっかく友だちになれたのに・・・・・」

上夫

「どうかしたのか?」

グレー・テル

「姉さん・・・・・ホントにこの人達なんですか?」

マリー

「そうよ・・・・・皆殺しにしなさい」

上夫

「グレー・テル・・・・・君、まさか・・・・・」

グレー・テル

「アクダーサンの四天王の一人です。」

生時

「思い出した!アクダーサンのフルネームはウエオハ・アクダーダ!」

上夫

「作者、静かにしてろ!今度うまい棒買ってやるから」

生時

「マジ!やつた!」

上夫

「それより、俺達は君と戦いたくない」

グレー・テル

「すいません・・・・姉さんとアクダーサンの敵は僕の敵なん
です」

瑠奈

「私が相手よ

上夫

「瑠奈さん・・・・

今、瑠奈とグレー・テルの戦いが始まろうとしている。
果たして瑠奈はグレー・テルに勝てるのか?

あ～、ネタが浮かばない・・・

第13章 瑠奈対グレーテル

グレーテルと瑠奈の戦いが、今始まろうとしていた……

そして、グレーテルが一瞬微笑むと、魔法で手から剣を出し、間合いをつめ、先に攻撃を仕掛けた。

剣を大きく振りおろし、瑠奈の頭の近くまで……
誰もが心の中で「斬られる……」と叫んだ。

だが、紙一重で交わし、そして瑠奈の回し蹴りが決まった。
グレーテルは体勢を崩すが、瑠奈の胴を薙ぎに……
瑠奈は後ろへ飛び、またも交わした。

マリー

「（グレーテルの攻撃を一度も交わすなんて……あの女、何者？）」

グレーテル

「凄い！僕は、魔法は苦手ですが、剣術には自身があつたのに……
でも、まだ終わりじゃないですよ」

グレーテルが構え、瑠奈が攻撃をしようとしたその時！

瑠奈目掛けて、苦無が飛んできた！

瑠奈は受け止め、飛んできた方を睨んだ……
そこには、龍一とジャパン・Xがいた。

上夫

「龍一さん……」

マリー

「ちょっと、邪魔する気？」

ジャパン

「その女は俺達の獲物だぜ！」

マリー

「何を勝手な……」

ジャパン

「勝手？ フン……俺はアクダ一の四天王になつたが、ヤツの手下じゃない！ 俺は俺のやりたいようにやつてもいい……そういう条件で四天王になつたのを忘れたか？」

マリー

「クッ……」

ジャパン

「さあ、龍一！ 今度こそアルテミスを殺せ！」

龍一

「アルテミス……殺す……」

瑠奈

「リュウ……」

瑠奈とグレーテルの戦いに、ジャパンと龍一が現れ、果たして、この先どうなるのか？

第14章 再対決（前書き）

どうもです^ ^
久々に「ホープ」の番外編を書きました。

第14章 再対決

再び師と弟子、妻と夫の戦いが始まった。

ものすごい攻防戦であるため、作者の私にも見えなかつた。

二人の体からはものすごい血が流れた。

だが二人とも戦うことをやめない。

グレー・テル

「すごいな〜、あの一人と戦つてみたいな〜」

ジャパン

「いいぞ！天神流の者同士殺しあえ」

瑠奈

「リュウ、お願ひ、目を覚まして……」

龍一

「アルテミス……殺す……」

瑠奈

「私が死ねば、あなたは元に戻つてくれる？」

生時

「ま、まさか瑠奈さん、死ぬ気じゃ……」

瑠奈

「今までありがとうございました。さよなら、リュウ……」

そういうと彼女は、短刀で自らの腹を刺した。

それを見た龍一の動きが止まつた。

龍一

「ルナさん……ルナさん！」

龍一は大声で叫んだ。

これは完全に元に戻つたようだ。

上夫

「ミサー！」

ミサ

「はーー！」

大人姿になつてゐるミサが、瑠奈を回復させよつ瑠奈の元へ走つた。

ジャパン

「マリー、その女を殺せ！」

マリー

「チツ！」

マリーは、雷の魔法でミサを攻撃した。

上夫

「ミサー！」

ドゴーン！

と音が鳴り響き、煙で周りが見えなくなつた。

やがて、煙が消えると、そこには片手でマニーの攻撃を受け止めたグレー・テルがいた。

マリー

「グレー・テル、どうじつもつ」

グレー・テル

「ねーさん、すいません……僕、その二人と戦いたいのです」

ジャパン

「おいおい、お前の弟には困つたものだ」

グレー・テル

「早く、あの女のところへ」

ミサ

「……」

ミサは急いで瑠奈の元に行き、彼女を回復させた。

瑠奈

「ありがと」

龍一

「ルナさん、すいません……」

瑠奈

「ホント、できの悪い弟子なんだから……でも元に戻ってくれて良かったわ」

ジャパン

「まあ、いい余興を見せてもらつた。礼といつわけじゃないが、デイールとかいづやつが、街で暴れているぜ!」

龍一

「何! どうだ!」

ジャパン

「メシア王国だつたかな……だが、もう滅んで、次の街にいるんじゃないかな」

龍一

「皆、急いで!」

ミサ

「グレー テル……助けてくれてありがとう!」

グレー テル

「へへ、龍一さんと瑠奈さん、僕が倒すまで、死なないでくださいね」

龍一

「ああ……」

マリー

「逃がさないわよ!」

グレー・テル

「ねーさん……僕は、今までねーさんのいう事を聞いてきました。

今度は僕のわがままを聞いてください

「ねーさん……僕は、今までねーさんのいう事を聞いてきました。

マリー

「……こ、今回だけよ

グレー・テル

「はい！」

龍一たちは、急いでメシア王国へ向かつた。
果たして彼らは間に合つたのだろうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1849f/>

ホープ～魔法の世界にも希望を～

2011年1月4日23時24分発行